

「憂鬱な」男たち

— 『互いの友』 にみる Victorian Masculinity 形成をめぐる —

“Gloomy” Men:

On the Process of Creating Victorian Masculinity in *Our Mutual Friend*

西垣 佐理

Sari NISHIGAKI

はじめに

近代的な意味でのジェンダーがいかにして作られたのかという問題には、様々な要因が含まれる。殊ヴィクトリア朝イギリスにおける男性性 (masculinity)¹ に関して言えば、産業革命以後の中流階級の男性、特にロンドン・シティ区に住まう、または郊外からシティに通うような男性たちが中心となって作り上げたものだと言える。そのような社会を活写した小説として、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の最後の完結した長編小説『互いの友』 (*Our Mutual Friend*, 1865) があげられる。この小説はジョン・ハーモンとベラ・ウィルファーの恋愛を巡る物語と、ユージーン・レイバーンとリジー・ヘクサムとの恋愛を巡る物語という2つのプロットを軸としており、2人の男性主人公を持つ。その一人ユージーンは最初から「憂鬱な」 (“gloomy”) 顔をして登場する²。彼は何度も “The gloomy Eugene” と表現され、³ “The gloomy Eugene, with his hands in his pockets, had strolled in and assisted at the latter part of the dialogue” (28) といったように常に物憂げである。またもう一人の主人公ジョンも、ポッフィン夫人から “Sometimes you have a kind of kept-down manner with you, which is not like your age.” (329) と言われるように自分を抑えた様子を示す。なぜ二人は、共に当時社会の中心的存在であった中・上流階級に属しながら憂鬱であり、自己を抑制しているのだろうか。それは当時の社会的背景やジェンダー (社会的・文化的性差) とりわけ当時の男性性に対する考え方と何らかの関わりがあるのではないか。本論では、彼らの憂鬱や自己抑制の原因を探る中で浮かび上がってくる要因を当時の時代背景も踏まえて考察し、これらのテーマがディケンズにとって何を意味しているのかを論じていきたい。

I

本論に入る前に、ヴィクトリア朝においてそもそも男性性の発露とは一体ど

のようなものを意味するのかを考えてみたい。というのも、それは結論を先取りするならば、『互いの友』における男性主人公たちの「憂鬱」は、男性性を発露できないことによるものだからである。そこでまず当時のジェンダーイデオロギーについて考察することにしよう。

ヴィクトリア朝時代は近代的な性分業システムが確立した時であった。なかでも産業革命は、とりわけ男性性のイデオロギーに大きな変化をもたらした。男性たちはサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の『セルフ・ヘルプ』 (*Self-Help*, 1859) などの著作によって、“Self-Made Man” となり、国家の繁栄を担う存在たることを社会から要求されたのである。しかし、産業革命の第一世代が大人になり、自分の息子たちを世に送り出す際に矛盾をきたすようになった。息子たちは、パブリック・スクールに入ってオックスフォードかケンブリッジを卒業し、何らかの職業につき、そしてしかるべき家柄の女性と結婚することを父親から要求された。自らが決めた人生を送るのではなく、父親の定めたルールに乗って大人になるのが一人前の男性だとみなされるようになってしまったのだ。⁴

そのような状況のもと、1860年代に入り帝国主義への萌芽が見られる中でイギリス社会が求めたもの、それがジェンダーの再確認だった。それは実に様々な形で行われたが、文学関連で言うと『互いの友』が描かれたのとほぼ同年代である1864年、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) が『ゴマと百合』 (*Sesame and Lilies*, 1864) という題で講演を行った。この講演は二つの講義、「国王の宝物庫について」 (“Of Kings’ Treasuries”) と「女王の庭園について」 (“Of Queens’ Gardens”) から成り立っていた。これらを読み解くことで『互いの友』に描かれたジェンダー構造の背景の一端を垣間見ることができよう。そこでラスキンの言う男性性とはいかなるものだったかを見ていくことにする。

まずラスキンは第1の講演「国王の宝物庫について」で読書によって知識を得ることを勧め、第2の講演「女王の庭園について」では、男女のジェンダーについて述べている。彼の論点は男女に優劣などなく、あるのは性別によって社会で果たすべき役割が異なるということであった。彼は次のように言う。

The man’s power is active, progressive, defensive. He is eminently the doer, the creator, the discoverer, the defender. [. . .] But the woman’s power is for rule, not for battle, — and her intellect is not for invention or creation, but for sweet ordering, arrangement, and decision. (Ruskin 59)

ラスキンは男女の性的分業を明確に位置付け、家庭の重要性を説くことでジェンダーを固定させようと試みる。更に彼は、男性たちは厳しい資本主義社会で傷ついているので、女性が癒しの力で男性たちをサポートするよう、以下のように示唆する。

Power to heal, to redeem, to guide, and to guard. Power of the sceptre and

shield; the power of the royal hand that heals in touching, that binds the fiend, and looses the captive; the throne that is foundation on the rock of Justice, and descended from only by steps of mercy. Will you not covet such power as this, and seek such throne as this, and be no more housewives, but queens?" (Ruskin 72-3)

このように、ラスキンは、男性は女性の感化力で、そして女性は自らが持つ癒しの力でそれぞれの性役割を果たすのだと述べる。またセアラ・エリス (Sarah Ellis, 1810-1900) も『英国の女性たち』 (*The Women of England*, 1840) で、

The sphere of their [women's] direct personal influence is central, and consequently small; but its extreme operations are as widely extended as the range of human feeling. [. . .] The influence of woman in counteracting the growing evils of society is about to be more needed than ever. (Ellis 1640)

と、女性の感化力が必要とされていると説く。このように女性を貶めるのではなく、高める言い回しを用いて女性たちを奉仕の義務へと駆り立て、相対的に男性性を示そうとするのが彼らの言説なのである。更に、ラスキンは後の帝国主義を見据え、国家にとって男性の力が不可欠であり、彼らが特に知識において強くなるのがひいては国を富ませる礎となるとも説く。このようなラスキンの考えは広くヴィクトリア朝イギリス社会に受け入れられたものであり、いわば当時の一般的な見解を代弁するものであったと言えよう。

現代批評の観点から見ると、例えばジョン・トッシュ (John Tosh) はヴィクトリア朝の男性性を家父長制と絡めて次のように定義づけている。

Authority, guidance and discipline continued to be viewed as central to the father's role. Masculinity, after all, was essentially about being master of one's own house, about exercising authority over children as well as wife and servants. Indeed rule as 'father' embodied the primary meaning of the term 'patriarchy.' (Tosh 89)

彼は男性が家庭内で権威を持つこと、そして結婚し子供を得ることが、男性性の表象でありその確立であるとする。彼はその対象を主に中流階級の男性に置いている。その理由は、当時の大英帝国の繁栄を資本主義の経済の側面から担う中心が中流階級の男性たちだったからである。故に経済的自立が一人前の男性として認められる一因となるのは当然のことである。更に産業革命の影響が如実に表れる。すなわち男性たちの働く場がそれまでの家庭内から家庭の外になったことである。それによって、公的領域 (社会) と私的領域 (家庭) との間に境界線が生じた。専ら家庭に留まるのを余儀なくされた女性とは異なり、トッシュが "Middle-class Victorian men were expected to be both paragons of domestic

virtue and devotees of the common good.” (Tosh 141) と言うように、男性は社会と家庭との両立を求められるようになったのである。

以上から、ヴィクトリア朝イギリスにおける男性性の特徴は次の 2 点に集約されるだろう。すなわち、第 1 に男性は性分業イデオロギーが確立された中流階級の家庭生活において「父権的権威」(paternal authority)を持つのが必要だということ、そして第 2 に公的社会(男性領域)の一員たることと家庭(女性領域)との両立が不可欠だということである。従ってヴィクトリア朝中流階級の男性たちが男性性を獲得するには、中流階級の発想のもとで自分の家庭を確立し、社会と家庭を両立することが不可欠なのだ。

それではこれらの前提を踏まえ、『互いの友』の主人公たちがいかにして男性性を獲得するのかを見ていきたい。

II

『互いの友』における二人の主要人物、ユージーン・レイバーンとジョン・ハーマンは「憂鬱」な顔つきや「抑えた」表情をしているわけだが、これらの表情が意味するものは一体何だろうか。ここではユージーンを中心に、「憂鬱・自己抑制」の原因と男性性形成との関わりについて考察したい。

物語の始め、上流階級のヴェニアリング夫妻が主催するパーティの席に、ユージーンは最初から「憂鬱そうな」態度で臨む。その様は、“Reflects Eugene, friend of Mortimer; buried alive in the back of his chair, behind a shoulder — with a powder-epaulette on it — of the mature young lady, and gloomily resorting to the champagne chalice whenever proffered by the Analytical Chemist.” (21) と描かれる。「憂鬱な」態度を取るユージーンは皮肉屋であり、たとえばハチのように働くのは良いことだと説くボッフィン氏に対して、彼は勤労の美点 (これは中流階級の美点でもある) を無意味なものとして片付ける。⁵ こうしたニヒリスティックな態度は、彼が上流階級のダンディであることを示すものだが、⁶ 同時に“*She [Lizzie] knows he has failings, but she thinks they have grown up through his being like one cast away, for the want of something to trust in, and care for, and think well of*” (344) というリジーの推察のとおり、ユージーンが自分の人生に対して決定権を持ちえないことに由来する無力感をも窺わせる。というのも、ユージーンは長男でないため家督を継ぐことができず、彼の職業は、彼自身 “*It [my profession = a barrister] was forced upon me, [. . .]*” (29) というように父親によって半ば強制的に決められたもので、彼に職業選択の自由はなかった。その彼が父親を評する様は以下の如く描かれる。

“[. . .] M. R. F. [My Respected Father] having always in the clearest manner provided (as he calls it) for his children by pre-arranging from the hour of the birth of each, and sometimes from an earlier period, what the devoted little

victim's calling and course in life should be, M. R. F. pre-arranged for myself that I was to be the barrister I am (with the slight addition of an enormous practice, which has not accrued), and also the married man I am not.” (149)

ユージーンの進路はヴィクトリア朝の慣習通り父親によって予め決められたもので、彼は自分の人生を選び取る権利すら持たない。彼はまた、法廷弁護士という「職業」を持つ身でありながら、顧客が一人もいないため経済的にも自立できない。彼の経済的基盤は父親の援助と多額の借金によって支えられており、経済的に家族に寄生していることは明らかである。更に、彼は労働者階級のリジーを愛しているが、父親の決めた縁談話を断ることもできず “Out of the question to marry her [Lizzie],” said Eugene, “and out of the question to leave her. The crisis!” (682) と葛藤に苦しむ。彼はしばしば父親のことを「我が敬愛する父」(“M.R.F.”)と呼ぶが、それは絶大な影響力を振るう父親に反対できない息子の立場を自ら皮肉った表現であろう。

ジョン・ハーモンの場合も同様のことが言える。彼の場合は、父親からの「金と結婚」の影響が一層密接に繋がった形で現れる。彼は自分の父親に関して次のように言う。

“[. . .] I came back, shrinking from my father's money, shrinking from my father's memory, mistrustful of being forced on a mercenary wife, mistrustful of my father's intention in thrusting that marriage on me, mistrustful that I was already growing avaricious, [. . .]. I came back, timid, divided in my mind, afraid of myself and everybody here, knowing of nothing but wretchedness that my father's wealth had ever brought about.” (360)

彼の遺産相続は、彼自身が言うように父親が決めた婚約者ベラ・ウィルファーと結婚することが条件だった。この条件は当時ありふれたものだったが、彼には非常に押し付けられたように思えた。だが、彼が遺産を相続したいと願う以上、遺言による自分の結婚相手を拒否する権利はもとよりなかった。その点ユージーンよりも父親の影響力が強く感じられる。しかも、偶然とはいえ彼は自分が死んだことになったので、遺言を拒否することもできない。彼自身の葛藤の中で秘密を抱えて生きていかなばならないとすれば、自然と自分を「抑えて」しまうのも無理はない。

このように、ユージーンやジョンの憂鬱や自己抑制は、とりわけ自分たちの「経済」問題と「結婚」問題に関して起こっている。本来ならば父親から自立して自分の選んだ職業につき、自分の愛する女性を妻にするのが男性的であるはずなのに、父親の決めた相手と結婚しないと社会の要求する男性性を実現できない。そのような仕組みにこそ、当時のイデオロギーによる「作られた男性性」が垣間見られるのだ。彼らは、比喩的に言えば自分たちの男性性が父親の強権の下で反発しつつもできないという未熟で「憂鬱な」状態を示している。

父親からの影響力から逃れられなければ、単に彼らのアイデンティティが確立できないだけでなく、男性としての未熟さも示す事にもなる。それ故、彼らが自分たちの男性性を獲得するには、その状態をいかに取り除くかが重要なのである。父親からの影響力、それはトッシュが“*For sons in turn, that sense of the father’s intrusive concern and his power to define — if not always exemplify — the meanings of masculinity conditioned their progress to manhood, no less than the moral influence of the mother.*” (Tosh 122) と指摘するように、一種の通過儀礼であり、一人前の男性として社会に認められるには重要な過程なのだ。

では、ユージーンとジョンはいかに父親の強力な影響下から逃れ、男性性を形成したのか。それには、トッシュが“*Only the final stage of marriage was a relatively fixed point in the transition to adult masculine status, [. . .]*” (Tosh 122) と示唆するように、「結婚」による自立があげられる。主人公たちは結婚によって女性たちのサポートを受け、新たな家庭を築くことで自分たちの権力支配の場を設け、男性性を完成させる。それによって「家庭」を中心とする中流階級的ジェンダーが確立し、究極的に自分たちが大英帝国の一員であるという認識も得るのである。

その過程がどのように実行されたのかを検討するために、主人公たちと女性との関係を見る必要がある。物語に登場するヒロインたち、ベラ・ウィルファーとリジー・ヘクサムは、比喩的に言えば男性たちの「憂鬱・自己抑制」を取り払うナースの役目を果たす。⁷それは看護行為を通してだけでなく、性分業イデオロギーの枠組みに組み込まれ、「健全な」家庭を作り上げることによって果たされる。では、主人公たちの「憂鬱・自己抑制」状態に彼女たちがどのように影響を及ぼしたのかを見ていこう。

まずユージーンの場合、彼は友人のモーティマー・ライドウッドと一緒に暮らしている。つまり、非常に強力なホモソーシャルの (homosocial) 絆が現に存在するのだが、⁸その強力な男同士の関係にリジーが介入することで、リサ・サリッジ (Lisa Surrige) が指摘する“*[Novel] moves its hero somewhat unconvincingly from strong male partnership to heterosexual marriage*” (Surrige 267) という過程、すなわち物語上における男性性獲得の過程が始動することとなる。⁹女性の介入により、女性を巡る男同士の「競争」も生まれるが、それは単なる恋愛の三角関係ではない。ユージーンとブラドリー・ヘッドストンのどちらがリジーに「知識」を授けるかという競争が見られることから、リジーの位置付けが「獲得すべき恋人あるいは妻」であると同時に「教育の対象」でもあることが分かる。

無学のリジーに教育を授けることは、彼女をただ労働者階級から中流階級の女性へと引き上げるだけでなく、社会の父権制的価値観を彼女に植え付け女性性を確立させることでもある。リジーが中流階級的な女性性を示すにつれて、相対的にユージーンの男性性が徐々に発揮される。たとえばユージーンはモーティマーと一緒に暮らす男所帯の下宿に「台所」という装置を持ち込むが、彼は台所用品が“*The moral influence of these objects [utensils], in forming the*

domestic virtues, may have an immense influence upon me; [. . .]” (282) だと、ふざけながらも言明するのだ。台所が中流階級の女性の領域であるという当時の常識、そして「台所」がもたらす「感化力」が中流階級的なものだという点から考えると、彼は女性の待つ「家庭」を擬似的に作り出すことで間接的に男性性を獲得しようとしたといえるだろう。

物語の終盤、彼は恋敵であるヘッドストンに暴行を受け、半死半生の状態でテムズ河に流されるが、リジーに助けられ看病される。この「癒し」の過程においてユージーンはいわば男性性を剥奪された単なる患者と化しているわけだが、「妻」“wife” (722) というまさに家庭生活を表す言葉によって意識を取り戻す。「妻」という言葉についてヒラリー・M・ショー (Hirary M. Schor) は “[. . .] the proper end of this novel [*Our Mutual Friend*] is to bring a dead man to life by teaching him to say one magic word, and the word is ‘wife’” (Schor 178) と述べている。彼はこの「妻」という言葉によって単に生き返っただけでなく、「夫」となって家庭を持ち、自分が主体となることを認識したのである。そしてリジーとの結婚によって、彼はそれまで持っていた上流階級の価値観から、“Now, I have had an idea, Mortimer, of taking myself and my wife to one of the colonies, and working at my vocation there” (791) とあるように勤労意欲を持つ中流階級の発想へと転換し、自分の所属する上流階級に対して “Therefore, I will fight it out to the last gasp, with her and for her, here, in the open field” (791) と彼女を守るために戦うことを決意する。「夫」となることによって、彼はリジーに対する主導権を再び手に入れると同時に「憂鬱」からも解き放たれた。最終的にはリジーとの結婚を父親から許され、彼は真の意味で男性性を確立するのである。

ジョン・ハーモンの場合にはユージーンといささか事情が異なる。ジョンにとって父の影響とは莫大な遺産 = 「金の力」であり、一度死んで別の人間にでもならない限りはその影響から逃れることはできなかった。だが偶然にしてそのような状態に陥った彼は、状況を最大限に利用して父の影からの脱却を図る。彼が財産のある故ハーモン老の息子ジョンとしてではなく、父と無縁の一男性ジョン・ロクスミスとしてベラに求婚するのもその表れである。しかし、彼は金の力にとらわれたベラに断られてしまう。¹⁰ そこで彼はポッフィン氏に協力を求め、ポッフィンは金にとりつかれた吝嗇家を演じてジョンに辛くあたる芝居を打つ。すると金銭への執着が深かったベラの心が変化し、彼女はいわば「金の力」から解放される。やがてベラはポッフィン氏に解雇されたジョンに愛情を抱くようになり、二人は結婚する。ジョンは自分とベラを父の影響 = 「金の力」から解放し、結婚によって「夫」としての新たな自己を形成する。ジョンは郊外からシティに通うサラリーマンとなり、私的世界 = 家庭と公的世界 = 職場を行き来するようになる。彼は数度にわたってベラに “I was thinking whether you wouldn’t like me to be rich?” (664) といった質問をするが、いずれもベラは「いいえ」と答える。このように、彼女は「金銭」の象徴する男性性を捨て去って「愛情」という女性性 (femininity) を選び取る。また彼女は『完全なる英国の主婦』 “The Complete British Family Housewife” (666) というマナー

ブックの助けを借り、一家の「主婦」および「母親」となることでジェンダーを内面化し確定する。彼女がもはや金の力に惑わされないため、ジョンは自分の正体を明かして父の遺産を手に入れる。父の影響＝「金の力」から逃れて、遺言によらず愛情によって結ばれた相手と家庭を持つに到ったジョンは、最後に「自己を抑えた様子」からも解放され、まぎれもない男性性を獲得したのである。

以上のような過程を経て、ユージーンとジョンは成熟した大人になると同時に、ヴィクトリア朝中流階級の男性性 経済的自立、そして「結婚」による家庭及び家庭内での「父権的権威」 を獲得し、社会の枠組みに組み込まれることになるのだ。¹¹

結び

「憂鬱な」ユージーンと「自己を抑えた」ジョンは、結婚に成功して中流階級の価値観に則った「健全な」関係を打ち立てたとき、初めて父の影響力から脱して男性性を獲得するに到った。ユージーンがリジーに教育の機会を与えて“lady” (796) と成し、ジョンがベラを「金の力」から解放して愛情＝女性性に目覚めさせたように、男性たちはまず女性たちに女性性を発揮させ、ついで結婚制度という枠組みにおいて彼女たちを保護する構図を取ることで、間接的あるいは相対的に自分たちの男性性を確立したのである。このように『互いの友』の主人公たちは、父親の抑圧という形で喪失していた男性性を、結婚し妻を得ることによって回復する。

ディケンズの作品には男性性の喪失と回復というテーマが主人公たちの人間的成長と重なって繰り返し現れるが、ジェンダーに関しては『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61) を例外として、¹² 執筆当時の支配的なイデオロギーが踏襲されている。そのイデオロギーとは男女を分業化された領域の観点から定義するものであって、そのイデオロギーの中では男性は結婚によって、あるいは妻を得ることによって初めて男性性を実現するとされていたのである。

しかし、それらの構図は作者が意識していたか否かは別として、当時の資本主義的産業社会、イギリスの植民主義に奉仕する役割を担っていた点には注意を払う必要がある。この作品が書かれた 1860 年代は、来るべき帝国主義の幕開けを告げる時代、その一方で、女性が社会に進出し始めた時代でもあった。その中心的存在たる中流階級の男女双方にそれぞれ振り分けられた社会的性的役割を再確認し、それを固定させる必要が生じたことは、ラスキンの講演からみても大いに考えられる。

『互いの友』に描かれたとおり、父親からの影響力から脱して妻を持ち、家庭を営むこと、それこそがヴィクトリア朝における男性性創出には不可欠の条件だったのでないか。だとすると、ディケンズは中流階級が安定したイギリス社会及び未来の国家を担ううえで求められるイデオロギーを、小説というま

さに中流階級のためのメディアを通じて広める役割を果たしたといえるだろう。

註

- * 本論は 2000 年度南山大学英米文学会シンポジウム「男性性の発明 19 世紀英米文学を読み解く」(2000 年 9 月 30 日、於 南山大学)で口頭発表したものに加筆・修正を施したものである。
- 1 男性性(masculinity)は女性性 (femininity) と比べて比較的新しい概念である。近年のジェンダー研究において、フェミニズム (feminism) の対立項としての男性学 (masculinism) が現在注目されつつある。男性性の発露は社会のイデオロギー構築にとって不可欠なものであり、好むと好まざるとにかかわらず刷り込まれていく。本論では男性もまた社会・文化の構築物であるという立場をとっている。
 - 2 本稿では“gloomy”を「憂鬱」と訳しているが、中世からの伝統的気質である“melancholy”とは性質が若干異なる。OED によると “gloomy” は “Of persons and their attributes: Affected with gloom or depression of spirits; having dark or sullen looks.” とされるが、“melancholy” は “Sadness and depression of spirits; a condition of gloom or dejection, especially when habitual or constitutional.” (強調は論者による) とある。また *Longman American Dictionary* によると、“gloomy” には “sad because you do not have a lot of hope” とある。ユージーン の「憂鬱」が “melancholy” ではなく “gloomy” と描かれるのは、彼が希望を持ってないゆえの「憂鬱」であるからと考えられる。
 - 3 Charles Dickens, *Our Mutual Friend* (Harmondsworth: Penguin, 1997) 25. 尚、本文中の引用はすべてこの版に拠り、(ページ数)で示す。
 - 4 男子の教育によるジェンダー確定に関して、ディケンズは既に『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1848) において、ドンビー氏が息子ポールに対して行う早期教育の場面について詳しく描いている。また、父親の息子に強権を振るうさまは『ドンビー』の他に、サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1847-48) におけるジョージ・オズボーン (George Osborne) の家庭描写にもみられる。
 - 5 *Our Mutual Friend*, 98-99.
 - 6 ダンディの憂鬱は一種のコンヴェンションだった。またダンディとしてのユージーン像は、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の『真面目が肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1895) に登場するアルジャーノン (Algernon) の前身と受け取られる場合が多い。ディケンズ自身も一種のダンディであったという説は Ellen Moers, *The Dandy from Brummell to Beerbohm* (1960) に詳しい。
 - 7 換言すれば、彼らの「憂鬱」は女性の愛情で癒された、とも言える。ここに

- 「憂鬱」という病を抱えた「患者」としての男性たちと、その「癒し手」としての女性という一種の看護の構図が浮かび上がる。また、女性の看護による男女のジェンダー逆転は、『リトル・ドリット』 (*Little Dorrit*, 1855-57) におけるエイミーとアーサー・クレナムの関係に顕著である。こういった例はディケンズ文学における 1 つの典型だといえよう。「癒し手」としての女性の役割については、拙論「「家庭の天使」から「白衣の天使」へ — *Little Dorrit* にみる nursing の実践をめぐって」(『関西学院大学英米文学』第 43 巻第 1 号、1999 年) を参照のこと。
- 8 ホモソーシャルな関係については、セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) の *Between Men* (1985) にある『互いの友』論に詳しいが、彼女はユージーンとブラッドリーの関係が “triangular, heterosexual romance — in Roman tradition — and then changes its focus as if by compulsion from the heterosexual bonds of the triangle to the male-homosocial one, here called ‘erotic rivalry.’” (Sedgwick 162) といったものだと述べている。
 - 9 女性の介入から始まる男性性の発露は、ユージーンやジョンの女性を「見る目」の動きにも表れている。女性の動きを常に「観察」するその視線の動きについて、キャサリン・ウォーターズはミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-84) の『監獄の誕生 監視と処罰』 (*Surveiller et punir: Naissance de la prison*, 1975) におけるパノプティコン(一望監視装置)になぞらえて論じている。
 - 10 ベラが金銭にとらわれた発想を持つに至った背景には、ウィルファー家におけるジェンダーの逆転現象がある。ウォーターズ (Catherine Waters) は “Wilfers would seem to subvert the ideology of domesticity, exploding its most cherished myths of love harmony with laughter, their deviant example helps to formulate a normative definition of the Victorian middle-class family.” (Waters 178) と、ウィルファー家がヴィクトリア朝の模範的家族像から逸脱していることを指摘し、更に “In articulating difference upon the basis of sex, and in the form of a binary opposition between an ‘unwomanly’ wife and an ‘unmanly’ husband, Dickens’s fiction helps to produce a norm of female identity founded upon woman’s ‘proper’ domestic role.” (Waters 179) と、ウィルファー夫妻の力関係の逆転を指摘している。
 - 11 男性性の発露には負の側面として、暴力でもって女性を支配する構図があるが、『互いの友』においてはアルフレッド・ラムル夫妻の関係に見出せるし、ブラッドリーのリジーに対する態度にもその一端が見られる。暴力と男性性との関係については John Kucich, “Repression and Representation: Dickens’s General Economy.” (London: Longman) にも詳しい。
 - 12 『大いなる遺産』において、主人公ピップを取り巻く世界はジェンダーの逆転に満ちていた。そのような逆転は、例えば、自分の姉夫婦の力関係の逆転、ミス・ハヴィシャム、エステラとピップの力関係の逆転などに見ることができる。詳しくは拙論「「逆転」の構図 — *Great Expectations* にみる

病と癒し — 」(『関西学院大学英米文学』第44巻第1号、2000年)を参照。

Works Cited

- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. Harmondsworth: Penguin, 1997.
- Ellis, Sarah. *Women in England*. 1840. *The Norton Anthology of English Literature*. Ed. M. H. Abrams, 5th ed., vol. 2. New York: Norton, 1986. 1638-40.
- Kucich, John. "Repression and Representation: Dickens's General Economy." *Charles Dickens*. Longman Critical Readers. Ed. Steven Connor. London and New York: Longman, 1996. 197-210.
- Moers, Ellen. *The Dandy from Brummell to Beerbohm*. London: Secker & Warburg, 1960.
- Ruskin, John. *Sesame and Lilies*. 1865; London: J.M. Dent, 1944.
- Schor, Hilarity M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- SurrIDGE, Lisa. "'John Rokesmith's Secret': Sensation, Detection, and the Policing of the Feminine in *Our Mutual Friend*." *Dickens Studies Annual* 26 (1998): 265-84.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. New Haven: Yale UP, 1999.
- Waters, Catherine. *Dickens and the Politics of the Family*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

出典：『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』 第24号 (2001年10月)
pp. 41-51.